

なかに「なわ」だより

No.203
2023.10

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 205
Tel. (045) 671-1109
振替 00200 - 1 - 47369
E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp HP : http://church.jp/naka/
発行者 なか伝道所／編集委員会 (題字 松橋 順)

宣教方針 ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。
集会 主日礼拝 日曜日(第1・第3はリモートあり、
第4 自主礼拝、教会暦による変更あり)
午前10時30分より

なか伝の「いま」



ある日の礼拝風景。個性豊かな人々がここに集まり、「なか伝」という場を育んでいる。遠隔地の方や高齢者、体調不良で外出できない方も、リモートで顔を合わせ、共に礼拝を守る。現在、月二回の礼拝に、ゲスト説教も依頼している。第四週は有志礼拝で証し会など。また、解説書を参考に聖書を学ぶ学習会も再開し始めた。

私を用いてください!!
炊き出しに参加して:
岩岡千恵子

寿地区の方々とお交わって十年になるうとしています、それまで私は寿地区センターに暮れに衣類等の日用品を送っていました。が現場も見ないうで、果たして 送った物が寿の方々が必要としているのか? 疑問に感じて、思い切って行ってみました、:怖かったです、この時なか伝の方から、「ここには体調不良、足の悪い方はいますが、危害を及ぼす人はいませんよ」と聞いて安心しました。そして初めて炊き出しに参加した時の光景は驚き、衝撃的でした、私の頭の中を政治家の顔が浮かび、「何もしてないのではないか!」と怒りが湧いてきました。と思いつつも参加するようになりました、当初は自分の自己満足、おせっかい、こわごわ びくびく、これで良いのか?と不安でいっぱい、そんな時、ちょうどクリスマス時期で、子どもの絵本で『くつやのマルチン』トリストイ民話に出会いました。(私は今でも絵本を読むのが大好きです。)

靴を修繕する仕事をしているマルチンはいつも困った人々に何気なくたくさんのお助けをして、感謝されていました。という物語ですが、この本の最後に、

「わたしのきょうだいである ちいさいもののひとりにしたことはすなわち わたしに したことがある (マタイ二五章四〇節)」

と、書き記されていたではありませんか!この言葉に、炊き出し時、「ほら、もっと自信をもって!!」と勇気を与えられたようでした。

そして実は私には寿の方々から日常の生活の中から教えてもらっている事がたくさんあるのです。 ありがとうございます!と感謝で一杯です。



(礼拝で「靴屋のマルチン」
を手に、証しする岩岡さん)

♪私となか伝♪

奈良光男

なか伝は、現在牧師をさがしている状況ではあるが、みんな力をあわせて向かえば必ず決まると思っています。決まらない原因を発見して見つけて治していけばいいと思う。

最近川崎の桜本の「ふれあい館」に、時間があればギターと歌の練習に行っている。かつて政党活動していた時、若い十代の青年といっしょに機材楽器持ち込みでミニライブのため練習していた頃を思い出します。今はひとりで借りています。さんび歌のギター伴奏、オリジナルソング作りのため、また歌、詩、リズムなど三点である。

川崎は一六才から五五才まで生きてきた第二のふるさとといつてもいいくらいでした。歌といえば小学校の頃ラジオから聞こえてたフォークソング、ロックンロールを耳にしていた。グループサウンズの曲など聞いていたが、一八才でボブ・ディラン、ジョン・バエスの歌に出会い、プロテストソングとの出会いは画期

的だった。同時に一九才で共産党に入党し、党の青年部、党の任務（にんむ）、文化（フォークソング）活動をしていて、今まで生きてきた価値観が変わった。入党と同時に今まで感じていた社会に対する矛盾の根源がわかり興奮した。党の仲間にもピートルズの好きな同年代の人もいた。ちなみに私はその当時から社会の矛盾をつくうたを、自分の言葉でつくっていた。当時フォークソングをうたいながら党活動していた同年代の仲間がいつばいいいた。私はへたでもほとんど自分で歌をつくりフォーク集会、ミニコンサートもしていた。

寿には、自分ではなにもできず、めっちゃくちゃ人生があり流れていた、と言う方が合っている。五三才で結婚したが、二年半の生活で終わってしまった。韓国の女性だった。がまんしていればよかつたかなあとも思う。仕事上大型トラックの運転者だったが、運転出来なくなつて、同じトラックターミナル内で知り合った人がチンピラだった。一緒に住んでいた女性が三年ビザが必要でチンピラの知り合いの人が会社をやっている、そこで働いている事にする

と、だましのテクニクにひつかかった。がんばって行こうと言われたが、時すでにおそいでチンピラから「金よこせ」といいようにされた。親兄弟をだまして金をとってこいと言われ、「出来なかつたらわかつてるんだらうな」と言われて、金をだましてとってきたり、何回となくそのくり返しが続いた。自分が住んでいたアパートの近くで、チンピラの乗る車の中でねとまりさせられて、「息子が車がほしいから」と言われ、強制的に買主にさせられた。そこから川崎区からの脱出のキツカケがはじまっていた。「富士の樹海に行け」と言われたりした。

寿に来て、はや一四年位たち、借金問題は解決し、今の仕事している。ただ残っているのは、兄弟から縁をきられた事である。

桜本、浜町での党活動の中で特に集中した活動（浜町支部での中活動）をしていたのは一八才〜三〇才であった。浜町での活動、党の任務、青年部（民青）、文化活動としてフォークソング（社会派）プロテストソングを歌い、サークル活動で隣町の

桜本での活動もしていた。大学生や在日二世青年達といっしょにレクリエーションをしていたし、みんなの話も聞いた。また党の機関紙の配集の中で在日の人たちとのコミュニケーションをとっていた。産業道路と日本鋼管の間のせまい土地に住んでいる所にも行っていた黨員の中に在日の人もいた。そこで人種差別の事もきいた。その内容は今でも心の中にのこっている。

今度桜本に処点をおくようになり、以前活動していた地区にも目を向きたい。もちろん寿、桜本にも目を向けて（人権差別、ヘイトスピーチ）など、権力に対するたたかいを広げて行きたい。また自分の出来ることを精いっぱい生かして行きたい。なか伝でのイエスとの出会いから、桜本にも目を向けさせてくれたエイシユンさん、関田さんに「アーメン！」



礼拝を支える奈良さんの演奏

使信 「収穫は多いが、働き人が少ない」

マタイによる福音書九章三五節〜一口章四節

なか伝道所代務教師 中村 清

主イエスは「収穫は多いが、働き人が少ない」と言われました。確かに、各教会で、「働き手が少ない」との声を耳にします。その原因は、

収穫の実りが少なくなり、少子高齢化等のため働き人が減少してしま

す。しかし、主イエスは「収穫は多い」と言われます。主イエスの見方は私たちの見方と違います。

ヨハネによる福音書4章35節の「サマリアの女性とサマリア人に対する伝道」の箇所、主イエスは「あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言っておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている。」と言われました。主イエスは、井戸のそばで水汲みに来た女性に出会いそこで話をしました。その後、その女性が町に出て行って「この方がメシアかもしれません」

と人々に伝え歩き、主イエスのもとにサマリア人たちが集まり、信じて信仰告白をしたのです。

主イエスは言われます。「目を上げて畑を見るがよい」と。「神に目を見よ」と。目を上げて十字架と復活の主を、罪と死に勝利された「主を見よ」と言われるのです。すでに主

がこの畑で働いておられる現実を見よと。私たちは、この主を見ないで別の所に目を向けていないでしょうか。収穫はすでに備えられています

ますが働き手がいないことが問題です。本日のテキスト9章35節にはこうあります。

「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた」と。これと同じ言葉が4章23節にもあります。この言葉で5〜9

章の内容が囲い込まれています。そしてこの囲いの中に、5〜7章の「山上の説教(教え)」と、8〜9章の「病気や患いのいやし」が置かれているのです。主イエスの宣教活動が語られ一つの段落を構成しています。そして10章から新たな段落に入ります。ここは十二弟子の選びと任命、そして宣教の派遣から始まっています。つまり9章までは主イエスの宣教活動に焦点があてられていたが、10章からはその働きが使徒たちにも与えられているのです。

羊の状態でした。世の指導者たちは、律法によって民を養い導くよりも掟を守ることを強調し民を苦しめていました。それゆえ人々は弱り果てていたのです。主イエスはそのような状況にある人々を、苦しみや病から解放したのです。そのことが8〜9章に記されている出来事なので、そこで癒された人々は、主の手によって起こされ、新しい命に生き始めたのです。新たな羊飼いを得たのです。

9章36節に「また、群衆が飼いのいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまされた。」とあります。ここで主イエスは、弱り果てた群衆を目にしました。そして「深く憐れまされた」とあります。この言葉は、「はらわた」という言葉で、はらわたがよじれるほどの激痛を覚えたという意味合いです。はらわたが痛む苦しみと怒りを覚えたのです。主イエスの癒しは

には働き手がなければなりません。それゆえ主イエスは「収穫は多いが、働き手が少ない」と言われたのです。そして、「働き手を送ってくださいるように、収穫の主に願いなさい」と言われました。ここで注目したいことは、「収穫の主に願いなさい」とは、「収穫の主に願いなさい」と言われた点です。働き手を得ることは私たちの働きではなく、収穫の主が与え起こされることです。収穫の主に対する信頼が必要です。主イエスも働き手(十二弟子)を得るため

に、山に登り徹夜で祈り、十二弟子を任命(ルカによる福音書6章12節)しました。主に願ひ祈って十二弟子を得たのです。本日のテキスト

この群衆の姿は、羊飼いのいない

に十二人の名が記されています。どの人も宗教的には全くの素人です。人間的に見れば、こんな人たちに何が出来るとか感じられません。神はこの人たちに「汚れた霊に対する権能」(10章1節)を授けられるのです。このような人々に力を与えお用いにならないのです。キリストの教会は、この権能を受けているのです。マタイによる福音書3章9節で「神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことができる」とあります。バプテスマのヨハネの言葉です。

なか伝道所は、この寿のなかにながらお建てになった伝道所です。私がお建てになった伝道所です。私が、この伝道所に関わらせていただいていることは、「この伝道所だから安心していられる」とか、「他の教会では疎外されていただろう」との声を聞きました。この伝道所できいきと信仰生活し、そしてこの寿に仕えていきたいとの志を与えられている皆さんを見て励まされています。私自身のことを考えても、まさに「こんな石ころ」のような者です。こんな者をもアブラハムの子として、選び宣教のために用いていただけのこととは感謝あるのみです。

最後に、なか伝道所に専任の牧者が与えられることをお祈りいたします。それを祈りの大きな課題として祈り続けます。



＊牧師招聘の取組みとこれから
(運営委員会・牧師招聘委員会)
小笠原敦輔

二〇二二年度末、運営委員会は会員にアンケートを行った。慎重な意見や消極的賛成の意見もあったが、会員の多くが牧師招聘を望んでいることを確認した。

その上で、牧師招聘委員会を立ち上げ、神学校などに牧師公募の公告を行った。そして複数の応募者の中から、招聘委員・運営委員と相談の上、最終的に一人の候補者に使信担

当を依頼し、交流の時を持った。しかし今回は、勤務条件等について、残念ながら最終的合意には至らなかった。小規模伝道所での牧師募集につきものの困難かもしれない。

今回の反省としては、招聘までの道のりを、より具体的に考え、そのための課題を共同体として認識し、準備し、メンバーがよりじっくり意見交換する機会を作れたかった。

また、手を挙げてくれたメンバーからなる「牧師招聘委員会」と、伝道所運営の中心となる運営委員会の連携をどう作り、伝道所全体の願いと方向性を具体化していくか、その合意形成のプロセスをさらに充実させたかったと思う。これからの無牧の伝道所の共同の時を、私たち自身の成長のためにも、大切にしながら、この輪の中に牧師が与えられ、共にイエスに従う聖書の学びができるよう、祈り合っていきたい。

【使信予定】

- 一〇月一五日 河口陽子伝道師
- 一月五日 島田勝彦牧師
- 一月一九日 中村清牧師
- 二月二四日 渡辺英俊牧師

編集後記

牧師招聘活動は継続。しばらくは月一回のペースで当伝道所にご縁のある先生方、巡回牧師、隠退牧師の先生方に使信をお願いしてまいります。 敦